

教員を目指す大学生と看護学生がもつ発達イメージの比較

著者	浅川 淳司, 山田 真世
雑誌名	金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 = Bulletin of the School of Teacher Education
号	7
ページ	83-89
発行年	2015-03-27
URL	http://hdl.handle.net/2297/41600

教員を目指す大学生と看護学生がもつ 発達イメージの比較

浅川 淳司・山田 真世*

The Image of Development in Teacher Training Student and Nursing Student

Asakawa Atsushi and Yamada Mayo

問 題

発達とは何か。教員を目指す学生は、教員免許を取得する過程で必ず心身の発達について学ばなければいけない。よって、その講義を受ける学生がどのような発達観を有しているかを把握できれば、講義の目標を適切に設定できたり、より効率よく講義を進行できると考えられる。これまでも、以下に示すように教員を目指す学生を対象にどのような発達観を有しているのか検討されてきた。

中澤・杉本・中道(2004)は、教育学部の学生を対象にイメージ画を用いて素朴発達観を検討している。その結果、学生が「人の乳児から成人までの期間に生じる、上昇・獲得のポジティブな質的变化」という発達観を持つ傾向にあり、成人期以降の死に至るまでの生涯発達の視点や次世代につながる循環性・世代性などの視点はほとんどの学生が持っていないことが示された。

また、中澤・杉本・中道(2006)では、教育学部の学生を対象にイメージ画を用いて発達、成長、成熟の素朴概念について検討している。その結果、中澤・杉本・中道(2004)同様、多くの学生が、青年・成人期までの単調増加の質的变化を描いたことにくわえて、発達と成長をあまり区別せず、同じような絵を描いていることが示された。

さらに、山名(2006)も、教員養成系の学生を対象にイメージ画を用いて発達観を検討しており、発達のイメージを、「能力モデル」、「成長モ

デル」、「一生涯の段階モデル」、「体制化モデル」、「その他」の5つに分類している。できなかったことができるようになるイメージの能力モデルと体が大きくなるなどのイメージの成長モデルが全体の7割を占めており、多くの学生が単調増加的な発達観を有していることが示唆されている。

以上の研究から、教員を目指す学生の多くは、発達を青年・成人期までの単調増加的な変化として捉えていると考えられる。しかし、この発達観が教員を目指す学生に特有なものか、一般的な学生に共通なものであるかは明らかにされていない。

吉中・鈴木・本郷(2000)は、福祉系の専門学生と大学生をあわせた学生群、保育士群、30歳以上の成人群を対象に発達曲線の図を選択させることで、それぞれの発達観の違いを検討している。その結果、学生の多くは発達が成人期で終わるものと捉えており、発達を一方向的で単調増加するものと考えていた。しかし、吉中・鈴木・本郷(2000)では福祉系の専門学生と大学生を直接比較しておらず、また、この大学生に関しては教員養成系に所属する学生かどうかの記載はなかった。

本研究では、単調増加的な変化として捉える発達観が教員志望の学生に特有であるかどうかを検討するために、看護師を志望する看護学生の発達観と比較する。教員も看護師も同じ対人的な仕事であるが、教員は主に幼児、児童、青

年を対象にする一方、看護師は乳児から老人まで幅広い世代を対象とする。そして幅広い世代と関わることを前提として養成教育が行われていると考えられる。よって、看護師を目指す学生は、発達観を問われた際に、教員を目指す学生とは異なり、老年期までを見通した発達観を有すると予想される。

看護学生を対象として研究では、森田・大西(2005)が人生のイメージ画を描画させることで検討している。その結果、8割以上の学生のイメージ画が人生の各時期における出来事を順に描いていく平坦型プロセスに分類された。また、子どもとの接触体験と子どものイメージの関係など、看護学生の子ども観を検討した研究はいくつかが散見される(例えば、藤沼・田崎・佐藤, 2008; 村上・田頭・三澤・辻野・杏脱, 2010)が、看護学生の発達観を検討した研究は筆者の知る限り見当たらない。

本研究では、中澤・杉本・中道(2004)や山名(2006)同様、学生の発達観を検討するためにイメージ画を用いる。やまだ(1988)によれば、イメージ画を用いる利点として以下の3点があげられる。第1に、イメージ画が知的な説明よりも素朴だが根の深い感性に基づいて表現されるので、より本音が現れやすいこと。第2に、イメージ画は社会的望ましさや価値観と直接結びついていることが少ないので、虚偽の表現をすることは少ないこと。第3に、イメージ画は全体を集約して表現することができ、文字や記号に比べて情報処理や情報伝達の方法として優れていること。また、言語を用いて発達観を検討することも可能ではあるが、イメージ画よりも自由度が低い画一的な回答になってしまう可能性がある。したがって、本研究ではイメージ画を用いて学生の持つ素朴な発達観を捉えることとする。

本論文の目的は、教員を目指す学生と看護師を目指す学生とで発達観が異なるかどうかについて検討することである。仮説として、教員を目指す学生は、発達をある時期の能力獲得や身

長などの単調な増加と捉えている一方、看護師を目指す学生は乳幼児期から老年期までの各時期に起きる出来事を重視したイメージを有していると予想される。

方 法

調査対象者 4年制大学の教員養成課程に在学する2年生を中心とする学生131名(そのうち養護教諭志望の学生が23名)と看護専門学校に在学する1年生を中心とする学生64名が調査対象者であった。調査時期に関して、教員養成課程の学生は2年生の前期に行われる発達に関する講義の初回に行った。看護専門学校の学生は1年生の後期に行われる発達に関する講義の初回に調査が行われた。これらの講義は教員養成課程並びに看護専門学校の学生にとって発達に関する初めての専門科目であった。ただし、それ以前にそれぞれの受講生が発達に関する事柄を学んでいる可能性はある。

調査手続き 上部に「発達のイメージを絵で描いてください」という指示が印刷されたA4版の用紙を配布し、特に細かな制約をつけずに自由に描かせた。回収するまでの時間は20分程度であった。教員養成課程の学生131名のうち35名が発達に関する絵を2つ以上描いた。本研究では、中澤・杉本・中道(2004)にならい、それらの絵を別個のもとしてカウントし、合計181個の絵を分析対象とした。看護専門学校の学生には2つ以上の絵を描いた学生は見当たらなかったため、64個の絵を分析対象とした。

結 果

本論文では、山名(2006)の発達イメージの分類を参考にしながら、学生の描いた絵を大きく5つに分類した。5つの分類は、それぞれ①能力モデル、②成長モデル、③ライフイベントモデル、④適応モデル、⑤その他であった。山名(2006)で報告されていた体制化モデルについては本研究で確認されなかった。各分類と各モデルに分類された絵の数をTable 1に示し、以下で

Table 1 各モデルに分類された絵の数

モデルのタイプ	志望職種	
	教員	看護師
①能力モデル	91	7
能力変化	66	6
進化	9	1
進歩	16	0
②成長モデル	72	6
身体の成長	27	0
動植物の成長	44	6
抽象形の拡大	1	0
③ライフイベントモデル	12	51
④適応モデル	4	0
⑤その他	2	0

は各モデルについて説明する。

①能力モデル

発達をできなかったことができるようになるイメージとして捉え、質的变化に重点を置いたモデルである。たとえば、言葉を話せるようになる、歩けるようになる、人の気持ちを考えられるようになるなどが該当する。教員志望学生では、91個(50.3%)の絵がこのモデルに該当し、看護師志望学生では7個(10.9%)の絵が該当した。さらに、能力モデルは下位分類として能力変化、進化そして進歩に分けることができた。能力変化は上述したような人間の能力の質的变化に重点を置いており(Figure 1の上段)、教員志望学生では66個の絵が該当し、看護師志望学生では6個の絵が該当した。進化では動物から人間に変化していく過程が描かれており(Figure 1の中段)、教員志望学生では9個の絵が該当し、看護師志望学生では1個の絵が該当した。進歩では、電話からスマートフォンへの変化といった道具そのものが高度化する様子が描かれており(Figure 1の下段)、教員志望学生では16個の絵が該当したが、看護師志望学生では該当する絵はなかった。進化イメージも進歩イメージも人を対象にしているわけではないが、

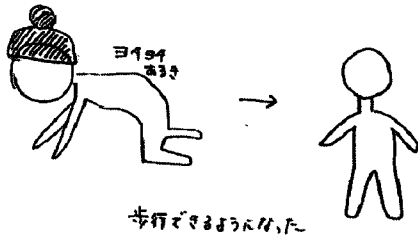
質的な変化であること、進化後・進歩後には、それ以前にはできなかったことができるようになってきているという意味が含意されていることから能力モデルの下位分類に含めた。

②成長モデル

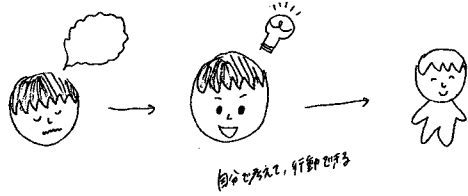
このモデルは、身体が大きくなるといった成長に近いイメージで、量的変化に重点を置いたモデルである。教員志望学生では、72個(39.8%)の絵がこのモデルに該当し、看護師志望学生では6個(9.4%)の絵が該当した。さらに、成長モデルは成長する対象によって身体の成長、動植物の成長、抽象形の量的変化の3つに分類できた。身体の成長は人間の見た目の体の大きさの変化に重点を置いており(Figure 2の(1))、教員志望学生では27個の絵が該当したが、看護師志望学生では該当する絵はなかった。動植物の成長では動物や植物が大きくなるまでの過程から過程が描かれており(動物がFigure 2の(2)、植物はFigure 2の(3)と(4))、教員志望学生では44個の絵が該当し、看護師志望学生では6個の絵が該当した。抽象形の量的変化では、丸が大きくなるイメージが描かれており、教員志望学生では1個の絵が該当したが、看護師志望学生では該当する絵はなかった。教員志望学生においては、動植物の成長の絵が最も多く、看護師志望学生では、動植物の成長以外に成長モデルに該当する絵はなかった。

③ライフイベントモデル

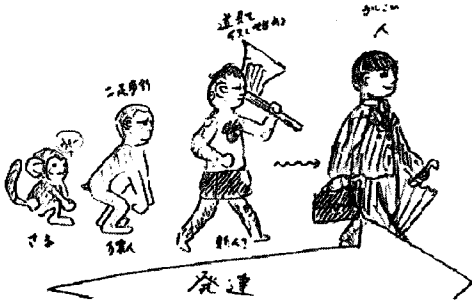
このモデルは、一生涯をいくつかの段階に分け、その段階で起こる出来事に焦点を当てたモデルである(Figure 3)。例えば、幼児期、児童期、青年期、成人期、老人期のように発達を区切り、児童期や青年期になれば学校に行き、成人期には結婚し、子どもを作り、老人期にはのんびり老後を暮らすといったイメージが描かれていた。段階を設定していることから、質的变化を想定していると読み取れるが、能力の獲得を重視しているわけではないことから能力モデルとは区別した。このモデルには、教員志望学



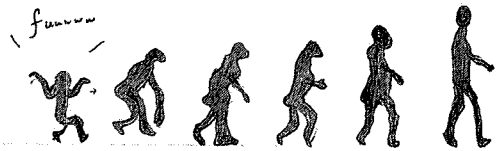
(1) 能力変化モデル (教員志望)



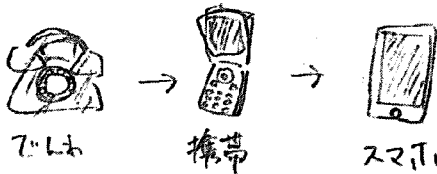
(2) 能力変化モデル (看護師志望)



(3) 進化モデル (教員志望)



(4) 進化モデル (看護師志望)



(5) 進歩モデル (教員志望)

Figure 1. 能力モデルの具体例

生では 12 個 (6.6%) の絵が該当し、看護師志望学生では 51 個 (79.7%) の絵が該当した。やまだ(1995)のエイジングや社会的役割、人生イベントに重点を置いた「過程」イメージと類似する部分が多かった。

④適応モデル

このモデルは、環境に合わせて能力や身体が変化するというイメージであった (Figure 4)。たとえば、ライオンが肉を食べられるように歯が鋭くなったり、キリンが高いところの実を食べられるように首が伸びたりするといったイメージが描かれていた。このイメージは発達において個人内の要因よりも環境の要因を重視し

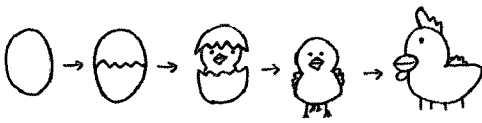
ており、能力が環境に応じて柔軟に変化していくことが想定されていると考えられる。能力モデルの進化と内容が類似している部分があるが、進化に分類されている絵には環境の影響を考慮して描かれた絵は見当たらなかった。教員志望学生では、4 個 (2.2%) の絵がこのモデルに該当したが、看護師志望学生では該当する絵はなかった。適応モデルは、山名(2006)や中澤・杉本・中道(2004, 2006)でも見られておらず、新しい発達のイメージであると思われる。

⑤その他

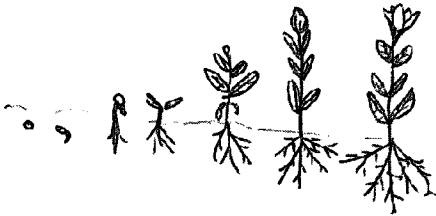
その他に分類されたイメージは上記のどれにも分類できず、描かれているイメージが理解し



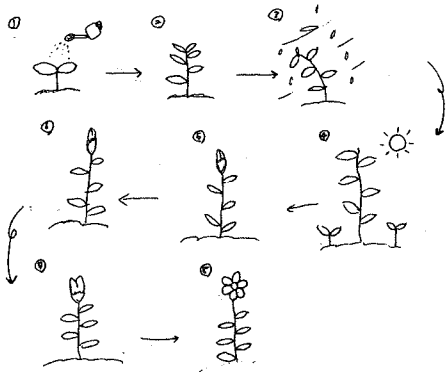
(1) 身体の成長モデル (教員志望)



(2) 動物の成長モデル (教員志望)

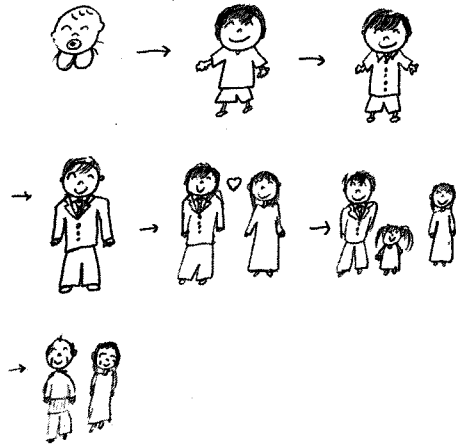


(3) 植物の成長モデル (教員志望)

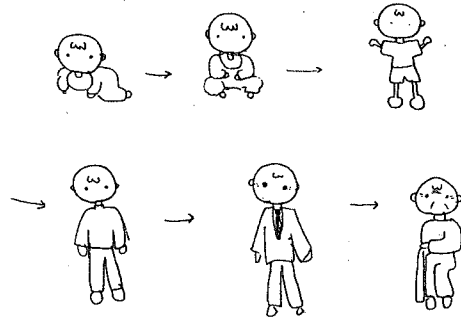


(4) 植物の成長モデル (看護士志望)

Figure 2. 成長モデルの具体例



(1) ライフイベントモデル (教員志望)



(2) ライフイベントモデル (看護士志望)

Figure 3. ライフイベントモデルの具体例



Figure 4. 適応モデルの具体例 (教員志望)

にくいものであった。山名(2006)が指摘するように、明確な「発達」というイメージを持っていないか、絵を描くことに抵抗があった可能性がある。

教員志望の学生と看護学生の発達観の比較

最後に、目指す職業によってイメージする発達像が異なるかどうか検討するために、人数の少なかった適応モデルとその他を除いて、2(教員志望・看護士志望)×3(能力モデル, 成長モデル, ライフイベントモデル)の χ^2 検定を行った。その結果、人数の偏りが有意であり($\chi^2(2)=128.06, p<.01$)、さらに、残差分析を行ったところ、教員志望の学生の方が看護士志望の学生よりも、能力モデルと成長モデルに分類される絵を描いている一方、看護士志望の学生は教員志望の学生よりもライフイベントモデルの絵を多く描いていることが示された($p<.01$)。

教員志望の学生の中には養護教諭志望の学生もいたため、それらを分けて発達イメージの傾向が異なるかどうか検討した。2(教員志望・養護教諭志望)×3(能力モデル, 成長モデル, ライフイベントモデル)の χ^2 検定を行った結果、人数の偏りが有意であり($\chi^2(2)=10.66, p<.01$)、さらに、残差分析を行ったところ、養護教諭志望の学生の方が教員志望の学生よりも、ライフイベントモデルの絵を多く描いていたことが示された($p<.01$)。能力モデルと成長モデルの描画の比率には偏りは見られなかった。

考 察

本論文の目的は、教員を目指す学生と看護士を目指す学生とで有している発達観が異なるかどうかについて検討することであった。それぞれの学生が描いた発達のイメージを分類したところ、5つに分類でき、教員志望の学生は、能力モデルと成長モデルに分類される絵を多く描いていたが、看護士志望の学生はライフイベントモデルに分類される絵を多く描いていた。この結果から、同じ人に関わる職業でも、関わり

方の内容が異なる教員と看護士を目指す学生では、それぞれがイメージする発達像が異なることが示され、仮説は支持された。

教員志望の学生の多くが発達を能力や成長に着目して単調増加するものと捉えているのは山名(2006)や中澤・杉本・中道(2004, 2006)と一致した結果であった。自らが教員になった際に教育の対象になるのは主に子どもであるため、発達をイメージするときにまず子どもが思い浮かんだと考えられる。実際に、能力モデルの能力変化に描かれていたのは子どもであった。そして、子どもは新しい事ができるようになったり、身体が大きくなる様子は、外から見てははっきりしているため、発達を能力の獲得や身体などの成長として捉えると思われる。

他方、看護学生は、発達を幅広く捉えており、約20%の絵は死まで描かれていた。看護の現場では、死を意識することを避けることができず、看護を学ぶ過程でも死を意識する機会があるため、死まで描かれていたと考えられる。また、教員志望の学生の中でも、養護教諭志望の学生と教員志望の学生を比較したところ、養護教諭志望の学生の方がライフイベントモデルの絵を多く描いていた。看護学生の結果とあわせて考えると、教育よりケアを意識する場合は発達を幅広く捉えるイメージを持つと考えられる。

しかし、両者の共通点として発達観が固定化している点が挙げられた。教員志望の学生はできないことができるようになる点で固定化しており、看護士志望の学生も期間については乳児期から老年期まで幅広く捉えているものの児童期には学校に通い、成人期には結婚して出産するなど、型にはまった発達の捉え方であった。

以上のことから、発達をはじめて学ぶ学生には、発達の多様性を念頭に置きながら講義を進める必要があると考えられる。やまだ(1995)は発達理論を成長モデル、発達モデル、成熟モデル、両行モデル、過程モデル、円環モデルの6つに分類しており、単調に増加していくという発達の捉え方は6つのうちの1つにすぎないと

指摘している。また、発達の過程で失われるものもあれば、子どもがその時点でできないことや発達の制約が次の発達にとって重要な場合があることも示されている(Elman, Johnson, Parisi, Bates, Karmiloff-Smith, & Plunkett, 1996/1998)。したがって、目に見える結果だけで子どもの発達を判断するのではなく、多様な視点から子どもの発達を捉えることが特に教員を目指す学生には求められるだろう。

一方で、学生が持っている発達観が強固というわけではない事も示唆されている。吉中・鈴木・本郷(2000)では、何も教示しない場合には単調増加的な発達曲線を選択していた学生が、「受精から死」の変化に対応する発達曲線を選ぶ様に教示すると、一方向的な単調増加の図を選択する割合は低下し、上がってから下がる曲線を選択する割合が増加することが示された。これらの結果から、教員志望の学生でも、生まれてから死ぬまでのスパンを意識させることで、発達をより長期的なプロセスとしてイメージできるかもしれない。くわえて、獲得や喪失など発達の多様性についての認識も深めていくことが講義では求められるであろう。

引用文献

- 藤沼小智子・田崎知恵子・佐藤和子 (2008). 看護学生の子どものイメージと被養育体験との関連. 共立女子短期大学看護学科紀要, 3, 7-13.
- Elman, J. L., Johnson, M. H., Parisi, D., Bates, E. A., Karmiloff-Smith, A., & Plunkett, K. (1998). 認知発達と生得性-心はどこから来るのか- (乾敏郎・山下博志・今井むつみ, 翻訳). 共立出版. (Elman, J. L., Johnson, M. H., Parisi, D., Bates, E. A., Karmiloff-Smith, A., & Plunkett, K. (1996). *Rethinking Innateness: A Connectionist Perspective on Development*. The MIT Press.)
- 森田美弥子・大西呂尚 (2005). 看護学生の「人生のイメージ画」-死生観を探る媒介として-. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 52, 153-163.
- 村上京子・田頭彩香・三澤真希・辻野久美子・沓脱小枝子 (2010). 看護学生の子どものイメージと形成要因-非養育体験・子どもの関わりとの関連-. 看護教育研究, 51, 576-582.
- 中澤潤・杉本直子・中道圭人 (2004). イメージ画に見られる学生の素朴発達観. 千葉大学教育実践研究, 11, 149-163.
- 中澤潤・杉本直子・中道圭人 (2006). イメージ画に見られる学生の発達, 成長, 成熟の概念の違い. 千葉大学教育学部研究紀要, 54, 159-165.
- 野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 (2007). 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ. 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌, 7, 169-180.
- やまだようこ (1988). 私をつつむ母なるもの-イメージ画に見る日本文化の心理- 有斐閣
- やまだようこ (1995). 生涯発達をとらえるモデル 無藤隆・やまだようこ (編) 生涯発達心理学とは何か 金子書房 pp. 57-92.
- 山名裕子 (2006). 大学生における発達のイメージ. 秋田大学教養基礎教育研究年報, 8, 23-28.
- 吉中淳・鈴木智子・本郷一夫 (2000). 学生と成人の発達間の違いに関する研究. 東北大学教育学部研究年報, 48, 191-204.